

Title	現代アフリカ文学とアフリカ表象 : アフリカのイメージをめぐる作家の位置
Author(s)	神田, 麻衣子
Citation	大阪大学, 2011, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/59135">https://hdl.handle.net/11094/59135</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈/a〉</a> をご参照ください。

***Osaka University Knowledge Archive : OUKA***

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

【8】

氏名	神 田 麻 衣 子
博士の専攻分野の名称	博 士 (言語文化学)
学位記番号	第 2 4 8 5 4 号
学位授与年月日	平成 23 年 6 月 30 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 言語文化研究科言語文化学専攻
学位論文名	現代アフリカ文学とアフリカ表象—アフリカのイメージをめぐる作家の 位置—
論文審査委員	(主査) 教 授 木村 茂雄 (副査) 教 授 伊勢 芳夫 准教授 山田 雄三

論 文 内 容 の 要 旨

本論文の目的は、エイモス・トゥットゥオラ『やし酒飲み』、グギ・ワ・ジョンゴとミシェレ・ギザエ・ムゴ『デダ

ン・キマジの裁判』、チママンダ・ンゴズィ・アディチエ『パープル・ハイビスカス』という現代アフリカ文学において「始点」あるいは転換点となる3つの作品を代弁＝表象という観点から分析し、歴史的な脈の中に位置づけることで、現代アフリカ文学の現在までの流れを社会の諸力とのせめぎ合いの結果として提示することである。

序論では、まずヨーロッパにおけるアフリカ表象の歴史を概観するために、『人類の現存人種』という1900年にイギリスで出版された一般向けの人類学図鑑を取り上げ、当時のアフリカ言説にみられる計測人類学的思考と商業的欲望の融合を明らかにする。次に、植民地支配下の教育制度において、アフリカの子供たちがヨーロッパ中心的な思考やアフリカ表象に出会うことで起こる植民地的疎外について触れる。

第1章では、ナイジェリアの作家エイモス・トゥトゥオラの『やし酒飲み』(1952)を取り上げる。この作品は欧米世界で「若い英語」で民話的世界を描いたものとして好評を得た一方、アフリカ人植民地エリートの間では「誤った英語」による民話の直訳だとして不評を買った。本論は、この不評の裏側には彼らが宗主国イギリスで白人のまなごしにさらされることによって感じる黒人としての劣等感があり、1950年代のイギリス社会がそうした感情をよりに強く育む場であったことを明らかにする。次に、『やし酒飲み』に収録されている「白い木の中の誠実な母」というエピソードに焦点を当てる。『やし酒飲み』は、一般的に民話的な世界を描いた「静的」ものとして、つまり過去や伝統的世界観をあらわすものとして認識されているが、本論は、『やし酒飲み』を同時代性の取り込みを積極的におこなう口承実践の延長上にあるものとしてとらえる。「白い木の中の誠実な母」のエピソードに取り込まれているのは、当時大量に流通したヴィクトリア女王の肖像である。こうしておこなわれるイギリスの他者表象が植民地支配の実態を暴露し、批判する力を秘めたものであることを明らかにする。

第2章では、ケニアの作家ギギ・ワ・ジオンゴとミシエレ・キザエ・ムゴの戯曲『デダン・キマジの裁判』(1976)を取り上げる。デダン・キマジとは、ケニアがイギリスの植民地支配下にあった1950年代に活動したギクユ人ゲリラ勢力の指導者である。白人入植者から「マウマウ」と呼ばれていた彼らを鎮圧しようと始まったのが「マウマウ」戦争であるが、この戯曲は「白人皆殺し運動」とみなされていた「マウマウ」戦争を語り直し、これを黒人の抑圧された歴史の流れの中に位置づけることを試みるものである。本論が注目するのは、戯曲のはじめに置かれている「黒人の歴史」と題された無言劇である。この無言劇は、コンラッドの『闇の奥』で描かれるアフリカ世界を観客に想起させながら、同時にこれまでの歴史上語られてはこなかったアフリカ人の苦悩を演じ込む。これによって、『闇の奥』における「原住民」の「不可解な狂飲」について、別の解釈の可能性、すなわちアフリカ人の主体的な語りがそこに存在する可能性を提示する。

第3章では、ナイジェリアの作家チママンダ・ンゴズィ・アディチエの『パープル・ハイビスカス』(2003)を取り上げる。この作品は、家庭を暴力的に支配する父親に対する抵抗を描くものである。主人公の少女カンピリの父親は、植民地エリートとして成功を収める過程で身に付けたヨーロッパ中心的思考、カトリック至上主義にもとづき家庭を「植民地的」に支配する。彼は土地の文化を「異教的なもの」として否定し、カンピリにそれとの接触を一切禁じたため、彼女は通常なら抵抗を可能にする基盤となるはずの民族文化をもたない個人として育つ。本論は、彼女が家庭から離れて親戚との共同生活を経験することを通して、民族文化への共感を育み、それによってゆるやかに果たされた「雑種化」こそ、彼女に父親への抵抗を可能にさせたと考ええる。

終章では、「貧困」という現代における支配的なアフリカ表象と貧困をめぐるアフリカ言説が、ピアフラというある特定の場面を写した一枚の写真から始まったものであることを明らかにする。続いて、本論で取り上げた3作品および作家が、その時代の支配的な言説といかに関わりあっていたのかを総括する。最後に、グローバリゼーションという新たな言説のもとにアフリカを描き出した映画、フーベルト・ザウバーの『ダーウィンの悪夢』(2004)を取り上げ、そこにおいても貧困という表象が新たな文脈の中に息づいていることを明らかにし、これが今後のアフリカ文学にとってなんらかのかたちでせめぎあうものとなる可能性を示唆する。

## 論文審査の結果の要旨

本論文（『現代アフリカ文学とアフリカ表象—アフリカのイメージをめぐる作家の位置—』）は、アフリカ最初の英語作家とされるナイジェリアのエイモス・トゥトゥオラの『やし酒飲み』（1952年）、ケニアを代表する作家ギギ・ワ・ジオンゴが、ケニア独立闘争の「マウマウ戦争」を題材に、ミシエレ・キザエ・ムゴと合作した戯曲『デダン・キマジの裁判』（1976年）、そして現代ナイジェリアの女性作家チママンダ・ンゴズィ・アディチエの小説『パープル・ハイビスカス』（2003年）をおもな材料に、20世紀半ばから21世紀初頭までのアフリカ人によるアフリカ表象の特質や変化を、西欧のアフリカ表象を参照しながら論じた研究である。

本論文の最も優れた点は、「表象」（representation）という文化的な営みを、その社会的・歴史的な位置づけとの関係で動態的そして多角的に論じている点にある。つまり本論文は、単なる「誤表象」（misrepresentation）の批判や「自己表象」（self-representation）のロマンティシズムに陥ることなく、アフリカ人のアフリカ表象と西欧人のアフリカ表象との関係性、双方向性、せめぎ合いなどの面から、アフリカ表象の困難と可能性に深く分け入った議論を展開している点が高く評価できる。

たとえば、第1章の『やし酒飲み』の分析では、アフリカの伝統的な口承物語のなかにヴィクトリア女王の肖像が戦略的に取り込まれていることを見出し、そこに現実の植民地主義をめぐる「同時代的風景」を浮かび上がらせる。また、『デダン・キマジの裁判』の「アフリカの歴史」を論じた第2章では、コンラッドの『闇の奥』の強力なアフリカ表象に単に抵抗するのではなく、その表象に一見沿いながら、それを内部から侵食して行く表象の戦略が指摘されている。現代の作品『パープル・ハイビスカス』における語りの主体の複数性という点を、ホーミ・バーバによる植民地的ハイブリッド性の理論を手掛かりに解き明かした第3章も興味深い。

本論文はまた、文学テキスト以外に西欧のニュースフィルムや映像作品、人類学や心理学のテキスト等におけるアフリカ表象も分析対象としていて、それが本論文に狭い文学研究を越えた文化研究の広がりを与えているといえる。

半世紀に及ぶアフリカ表象の歴史を三つのテキスト分析を中心に論じた手際は見事だが、そこには当然ながら、まだ埋め尽くされていない空白部分があるのではないかという印象も残る。しかしこのことは、上述のような本論文の成果を決して否定するものではない。

以上により、本論文は博士（言語文化学）の学位論文として十分に価値あるものと認める。